

象徴的身振り（ベビーサイン）の保育に与える影響 I

The Influence of Symbolic Gesture (Baby Sign) on Child Care I

赤 津 純 子

AKATSU, Junko

象徴的身振り（ベビーサイン）の内容と実際の保育現場での使われ方、保育に与える影響に関する一連の研究のうち、今回は、乳児の用いるベビーサインとヒトの手話と類人猿の用いる手話との機能的な違い、ベビーサインが家庭保育、集団保育の現場で使われるようになった経緯、そして特に集団保育の中での活用例（保育者にとっての意義）に焦点を当て報告する。

はじめに

記号的な機能を果す身体の動きを総称して身振り言語という。ヴント（Wundt, W.）は身振りを指示身振り（対象を指示するもの）叙述的身振り（対象を模倣するもの）象徴的身振り（対象の抽象的な意味を表現するもの）の3種類に分けている（佐々木1995）。

ここ10年ほど前から家庭保育の現場では「ベビーサイン」という言葉をよく耳にするようになった。象徴的身振り（ベビーサイン）とは話し言葉を習得していない乳児とコミュニケーションを行なう方法としてアメリカで考案されたものである。まだ言葉を話すことの出来ない乳児が手話を教示され、学習したのち、自ら使うようになった時、研究者によってそれをSymbolic gesture（象徴的身振り）、Sign、Signing、Sign Language等と命名している。これらの通称がベビーサインである。（本研究では以下ベビーサインと表記

する。）

話し言葉が使えるようになる以前の乳児は、自分の意思を伝える手段としては、発声、泣き、表情、指差し、身振りなどを用いる。養育者は乳児の様々なサインを察知して、お互いの意思を疎通させる。この時、乳児と養育者との間に共通に理解できるわかりやすいサインがあれば、より合理的に意思疎通が図られるはずである。

問 題

ベビーサインの起源

乳児に手話を教える試みはアメリカで始まった。聴覚障害者を両親に持つ健常の乳児が手話を用いてその両親と話し言葉より早い時期からコミュニケーションをすることに注目したガーシア（Garcia, J.）の研究と、自分の娘がコミュニケーションの手段として言葉が話せるようになるよりも早い時期から自発

キーワード：ベビーサイン、手話、保育

Key words : Baby Sign, Sign Language, Child Care

的に身振りを使うことに注目したアレドロ（Acredolo, L. P.）らの研究が初めてであるといわれている（吉中2002）。

アレドロとグッドウィン（Goodwyn, S.）（1985年）はアレドロの娘が自主的に使った身振りにヒントを得て、娘が興味を持つものを模倣しやすい単純な身振りに置き換えて、彼女に教えた。娘もそれを用いて意思を伝えようとした。この論文ではSymbolic gesture（象徴的身振り）と記している。後にこれを用いた育児を推奨する育児書の題名をアレドロは「Baby Sign（ベビーサイン）」とした。日本ではこの「ベビーサイン」という書名の本が出版されると、それが通称として使われるようになった。

個々の家庭で、母親が育児をする時の育児法の一つとして利用することから始まったものであるが、その後、ベビーサインの使い方を教示する教室が普及したことや、様々なベビーサインの実践本が販売されたこと等により一般的に広がっていった。

ベビーサインと手話との関係

アレドロらの研究以後、アメリカではベビーサインを用いた育児法が盛んに行なわれるようになった。日本でもアメリカ在住の日本人からベビーサインの概念が導入され、いくつかの団体が作られるまでになっている。初期には書籍に出ているアメリカ手話をそのまま使用していたが、徐々に日本手話との混用や、日本手話とは異なり、子どもの発達を考慮したより単純化した独自のサインなども考案されるようになってきた。

【ベビーサインと手話との相違】

手話は「音声言語と比較して、意味の全体

を瞬時的に視覚的に表現できる、ゆるやかな法則にしたがっており任意な表現を作り出せるなどの特徴がある。」（佐々木1995）というように、単に、単語としてだけではなく、意味全体を表現できる文章の機能をも果たしている。

ベビーサインは音声言語と共に用いられる。乳児に対してはヒトに用いられる手話と同じ手話単語を教示する。その時には同時に音声言語が添えられる。聴覚障害者には音声言語を発しても本人には聞こえない場合が多いが、乳児には視覚的にサインが、聴覚的に音声言語が同時に提示されることになり、2つの情報を同時に受理できることになる。この場合音声言語は文、ベビーサインは文ではなく、主に単語としての役割を果たす。

【アメリカの手話と日本の手話の起源】

手話の表現形式はそれぞれの国により異なる。最近の日本のベビーサインの基本になっている手話はアメリカ手話と日本の手話である。

アメリカでは初期には、スペイン、ポルトガル、フランス、イギリスなどの諸国から来た移民がそれぞれの国の手話を使っていた。その後、1817年にアメリカで最初の聾学校が設立された時に、フランス人の教師がフランス手話を用いて指導したことをきっかけにフランス手話がアメリカ全土に広がり、それがそれぞれの地域の手話と混ざって現在のアメリカ手話が形成されたといわれている。

日本の手話は、1878年に京都府立盲啞院を設立した古河太四郎が教育法について模索していた時に、生徒達が自発的に身振りを作り出してコミュニケーションを図っている姿を見て、それをヒントに教育上必要な単語に対

応させた手話を考案したのが始まりである（大杉2002）。

【ベビーサインの2つの型】

ベビーサインは現在、日本ではアメリカ手話と日本の手話を取り混ぜて使用されている。

吉中（2002）は「手話準拠型」と「自由創造型」の2つの流れがあることを指摘している。

「手話準拠型」はアメリカ手話や日本手話という公に使われている手話を用いるものである。中には乳幼児の発達を考慮して簡略化した手話も含まれる。一方「自由創造型」とは子どもが自発的に創造したり、養育者と子どもとの相互交渉の中で自発的におとなの動作を模倣したりして出来てきたオリジナルのものである。

家庭の中では「手話準拠型」と「自由創造型」を織り交ぜて使用する場合もあるが、集団保育の場ではみんなが共通して理解できるように「手話準拠型」のみを用いている場合が多いと考えられる。

また近藤（2004）は手話をより単純化し、グーとパーという手の開閉だけを用いる日本の乳児が使いやすいサインを独自に考案している。

話し言葉として英語を習得させるために、その前提としてアメリカ手話を用いる教室もある。この場合サインと一緒に添えられる音声言語は英語である。

ベビーサインはまず、乳児に教える前に、養育者が自らそれを習得する必要がある。習得の仕方としてはベビーサインを教える教室に通う、ベビーサインの啓蒙書を読むの2種類である。

日本では、初期には、「手話準拠型」と「自

由創造型」それぞれのベビーサインを用いた育児を海外で経験した者が帰国後、教室を開いたり書籍を出版したりして広めていった。そしてそれが、新聞、テレビ等のマスコミの情報により、広く知られるようになってきた。現在ではアメリカや日本の手話だけでなく、自由創造型も含み、様々なベビーサインが入り混じって使われている。

日本では日本ベビーサイン協会の教室が普及しており、その他、海外でベビーサインを育児に使用していた母親が帰国後教室を個人的に開いている場合などが見られる。

【類人猿の用いる手話とベビーサイン】

チンパンジー、ゴリラ、ボノボ等の類人猿に言葉を教える研究は古くから行なわれている。

人間の用いる話し言葉を直接に教え、発話させようとしたヘイズ（Hayes, C.）らのチンパンジーのヴィキイ、ケロック（Kellog, W. N.）らのチンパンジーのグァ等の研究、手話を用い手話で応答させるガードナー（Gardner, A. R.）らのチンパンジーのワシュー、パターソン（Patterson, P.）のゴリラのココ等の研究、レキシグラム（単語文字）を用い、レキシグラムで文を構成させ応答させるヤーキーズ霊長類研究所のチンパンジーのラナ、京都大学霊長類研究所のチンパンジーのアイら等の研究、プラスチック形態板を用い、文を構成させるプレマック（Premack, A. J.）のチンパンジーのサラ等の研究、音声言語で伝え、レキシグラムで文を構成させるランバウ（Rumbaugh, S. S.）のボノボのカンジ等の研究などがある。

このうち、類人猿の用いる手話とベビーサインとの共通点、相違点については次のよう

に考えられる。

ここでは特にチンパンジーを用いたガードナーの研究と比較する。

類人猿の用いる手話は人間の用いる手話とは異なる。また様々な類人猿が用いる手話はそれぞれ個々の研究者の環境の設定に違いがあるため、そこで使われるようになった手話をどれもが同一のものであると見なすことは出来ない。たとえばテラス (Terrace, H. S.) のチンパンジーのニムの研究は、手話以外に音声言語を聴くことの出来る環境で行なわれ、ワシューのような手話のみの非常に統制された環境での研究ではない。またニムの身振りは単なる模倣であることが後にわかった。

ワシューがガードナーの下で手話を使っていた環境は非常に統制されており、ワシューの前ではヒトの音声言語は全く使われず、手話のみが使用されていた。他には、叫び、笑い、歓喜の発声やその他の意味のある音声信号で意思疎通をはかっていた。

酒井 (2002) は「人間がチンパンジーに教えたのは、意味を持つ「ジェスチャー」であって、自然言語としての手話ではない。……第一に類人猿は、人工的なシンボル (図形) とその意味を連想して覚える能力を持っている。……ジェスチャーやシンボルと意味との連想関係を覚えたからといって、言語を使っているというのは間違いである。第二に、類人猿がシンボルを使って解釈している意味が、人間の言葉の意味と同じであるという保証は全くない。イヌも人間の言葉を使って訓練できるわけだが、動物は人間の言葉に反応しているのであって、『理解している』とは限らない」(p 29)「類人猿の『言葉』には語順がない。……いずれもサイン (手話単語) を覚えただけであって、文を作って会話をしたという例

は、これまで1つもない」(p 31)と述べている。

共通の「意味」を確実に理解しているかどうかは定かではないが、ワシューは手話を用い、お互いの「意思」は疎通させた。媒介の手段としては、ワシューの手話は機能しているといえよう。

むしろこの酒井の指摘はベビーサインに当てはまる。

ワシューについては「人間の子どもの同じような言語発達を示した理由は、条件づけられたり、訓練されたり、あからさまに教え込まれたりしなかったからだろうという。耳が不自由な親のもとに生まれた耳が不自由な人間の子どものがするのと同じように、大人の人間と自然に手話を交わすうちにワシューたちは手話を習得したのだ。」(ファウツ (Fouts, R.) 2000 p 304) と述べられているように強制をしないことが大切である。これはベビーサインの指導の中でも行なわれている。ワシューはガードナーの研究所を離れた後、チンパンジーが生得的に取得している身振り、音声、表情を使うチンパンジー、かなりの英語を理解しているチンパンジー達と一緒に生活することになった。音声言語をそれまで聞いたことのなかったワシューはここで、初めて、手話以外に、音声言語に触れることとなった。このような「霊長類版のバベルの塔」(p 153) とファウツ (2000) が称する環境の中でワシューはさらに、自主的に手話を使い、またそれを養子であるルーリスというチンパンジーに教えている。

*ワシューの「花」の手話

アメリカ手話では5指全ての指先が触れるようにまとめて、花を嗅ぐように鼻孔に触る。ワシューははじめ人差

し指一本で鼻孔に触れていたが、特に矯正することもなく、自然にヒトの使う手話を観察するうちに2、3ヵ月後には正しくはなの手話単語が出来るようになった。

アクレドロの娘の「花」のベビーサイン
匂いを嗅ぐしぐさ（普段両親が花を見つけては花の匂いを娘に嗅がせていたことがきっかけで出来たサインで、本人のオリジナルである。）をする。

日本手話の「花」

両手で花の蕾を作り、ゆっくりと回転させながら開く

ベビーサインの発達の位置づけ

言葉を話す前の乳児は、出生直後から泣くことにより意思を伝える。その後、喃語、音声模倣、指さし等を用いてヒトとコミュニケーションを取っていく。ベビーサインは丁度この前言語期の指さしを多く用いる頃から、コミュニケーションをはかる媒介の一つとして使われることになる。ただ、ベビーサインは自然発生的ではなく、おとなによって外部から意図的に導入される点が他の“ことばの前のことば”とは性質が異なる。

話し言葉を話すようになると、ベビーサインの出現率は自然に減少してくる。しかしながら、たとえば公共の場など大きな声が出せない場所でサインを使って意思疎通をしたり（ロング2003）遠くにいる者に意思伝達をしたりもできるので、全くすたれることはなく、子どもが成長してからも場合によってはベビーサインは使われる。

家庭で使われるベビーサイン

核家族化の影響で自分の育児に自信を持っていない母親が少しでも子どもとの良い関係を持ちたい、子どもの欲していることを理解したいと思う時、このベビーサインは母親にとって救世主的な役割を果たす。効用として吉中（2002）は1乳児と母親のフラストレーションを低減する2乳児の苦痛を察知できる3母子の絆が深まる4乳児の話し言葉の習得を助長するの4つを挙げている。また近藤（2004）は1早期から親密なコミュニケーションができる2乳児も母親もイライラが軽減するの2点を挙げている。この他に「見ることと手指を動かすことが連動して脳神経をしっかりと発達させるなど、その後の言語の習得に効果的であるといわれている（p 6）」と述べている。これはグッドウィンら（1993）の研究に基づいての見解であると思われる。しかしながら、いずれもが日本の家庭で使用されているベビーサインについては学術的に裏付けられた資料はなく、今後検討が行なわれることが必要である。

言葉が話せるようになる以前の子どもは、自分の持てる限りの表現法を用いて、おとなに語りかけている。それを察知する能力が弱くなってきた、感受性の乏しくなった昨今の親にとっては、ベビーサインは自身にとって理解しやすいわが子からのメッセージとなる。

ただ、どの子どもでもベビーサインを使ってすぐに楽しくコミュニケーションがはかれるわけではない。必ずしも期待するような効果が得られない場合もあることを念頭に入れる必要がある。

効果と養育者の心理については今後検証していく予定である。

集団保育場面で使われるベビーサイン

ベビーサインは、個々の家庭だけではなく、集団保育場面でも保育に活用されている。本研究では、実際の集団保育の現場で、どのようにベビーサインが用いられているのか、保育に与える影響について考察する。

今回は具体的な集団保育の中での使われ方について、保育者の指導の仕方、意識、保護者との連携、子どもの反応について調査する。

方 法

1 調査対象

千葉市内の私立保育園

1歳児クラス（1歳6ヶ月から2歳4ヶ月）15名0歳児クラス（0歳5ヶ月から1歳4ヶ月）8名の2クラスでベビーサインを用いた保育を行っている。

基礎としているのは日本ベビーシッター協会の資料である。ベビーシッター協会の講師認定試験に合格した保育士が0、1歳児の保育に当たっている。

2 調査方法

1ヶ月に1回、実際の保育の場面の観察（ビデオ撮影・直接観察）、子どもの言語発達に関する調査（質問紙）、保育者へのインタビューを行う。

結果及び考察

1 保育者の指導の仕方

歌唱、絵本の読み聞かせ、一斉保育、トイレ、お散歩、食事など日々の決まっている行為を行なう時、子どもに話し掛ける時に、保育者がベビーサインを示しながら言葉がけを行なう。子どもには繰り返すようには特に強

制はしていない。自然に習得するよう配慮していることがわかる。また、保育者の身振りと言話はどちらもゆっくりと明瞭で、2、3回反復される。

2 保護者との連携

保護者はベビーサインを用いた保育を行っていることを了解しているが、特に保育園側から家庭でも使うように強要はしていない。ただお便りで主要なサインは情報として知らせている。

保護者はベビーサインを特に家で使用するということはないが、子ども自身が家庭で自発的にサインを使うことはある。保護者はそれが何のサインか分からず、翌日、保育園で保育士に確認して初めて分かることもある。

集団保育の場で使われているベビーサインは家庭ではほとんど強化されない。

3 子どもの反応

- 1歳児クラスは一語発話、二語発話ができ、ベビーサインも使用している。入園1ヶ月後から自主的に使い始めた女兒（2歳4ヶ月）は発語と共にベビーサインを用いる。例えば、歌をみんなで歌い終わってからひとり、自発的にサインを伴いながら歌詞を歌う。
- 入園直後の女兒（1歳6ヶ月）は保育者が歌を歌いながらベビーサインを示している時に、他の児たちの様子を見て真似しようとする。しかしながらこの児は明瞭には示せない。

3 自発的場面

- （1）食事の時に食べ終わった児が「おしまい」のサインをして保育者に伝える。

*「おしまい」のベビーサイン
アメリカ手話では上に向けて開いた手のひらをすばやく裏に返す。
日本手話では上に向けて開いた手のひらをすぼめながら下に降ろす。

この児は日本手話を用いている。

保育者は複数の子どもの食事の世話をしているため、食べ終わったことを示す「おしまい」のサインは早く気づいてくれるように、自分の存在をアピールするのに有効である。

- (2) 食事の終了した者から配られるデザートバナナを早く配ってもらいたくて、「バナナ」と発声しながらバナナのサインをする。
- (3) 午睡の直前に保育者のところへ行って昼食に出たバナナがおいしかったことをバナナのサインを示して伝えようとする。

午睡の前というリラックスする、機嫌の良い時にサインを自主的に使っている。機嫌の良いときに自発的に使うという現象は指さし、喃語、プレジャーサイン（志村1989）等の際にも見られる現象である。

*バナナのベビーサイン
アメリカ手話では人差し指を立ててバナナを表し、もう片方の手で皮をむく動作をする。
日本手話ではバナナを持つように片手を軽く握り、もう片方の手で皮をむく動作をする。

- 子ども達は日本手話を用いていた。
- (4) 絵本を見た後に「花」のサインを試してみる。

*「花」のベビーサイン
日本手話の簡略化で、両手で作った花の蕾をゆっくりと開く（既述のワシユ、アクレドロのサイン参照）

4 意図的場面

- (1) 歌の歌詞の中に動物名、物等の名詞が入っておりそれを保育者がベビーサインで示しながら歌うと一緒にサインを使う。時々発声をする。
- (2) 絵本を保育者が読みながらベビーサインにより登場する動物名、乗り物名を示すと一緒にサインを使う。

4 保育者の意識

実際にベビーサインを用いて保育を実践している保育者にベビーサインを用いるようになってからの自身の行動、気持ちの変化についてインタビューした。

「ベビーサインの指導者として講習を受け、ベビーサインを覚えた。それを保育の中で使うようになった当初から、それほど使うことについて大変であるという意識や抵抗感はなかった。今では意識しなくても自然と使えるようになっている。

言葉に添えてベビーサインを用いているので、言葉だけの場合より、子ども達の注意を引きながら、理解できるようにゆっくりと身振りを見せるため、発声もそれに従ってゆっくりとはっきりと発音するようになった。

また、1つの単語を繰り返し発声するようになった。」

保育者が特に意識して多く用いている手話は「帽子」と「靴」と「おしまい」である。「帽子」と「靴」は毎日外に出る時に着せさせるもの、「おしまい」は色々な活動の終了時に必ず用いている。

保育者は自分の行動を意識化し、このように発話だけの場合とは異なり、ベビーサインを発話に伴って用いる場合には言葉をゆっくりと繰り返し、明瞭に話していることを述べている。家庭の母親達も無意識のうちにこのような行動を取っているものと思われる。これが言葉の発達を促進するという効用の一つにつながるのではないだろうか。

まとめ

1歳児クラスでは一語発話、二語発話ができるようになった子どもに対しても、保育者はベビーサインを用いて会話をしていた。集団保育場面では保育者がベビーサインを用いることは、保育者の発話が明確になり、また子ども達は保育者の手の動きに注目するので子どもの注意を喚起するのに有益であった。一方子どももベビーサインを使用することで大勢の中での自身の存在を主張することができていた。

ベビーサインの獲得の有無と言語発達との関係については、今後0歳児の資料の分析を通して検討する。

引用・参考文献・参考資料

- ・ Acredolo, L.P and Goodwyn, S. W. 1985 Symbolic gesturing in language development: A case study. Human development 28 40-49
- ・ Goodwyn, S.W and Acredolo, L.P. 1993 Symbolic Gesture versus word : Is there a modality advantage for onset of symbol use? Child Development 64 688-701
- ・ 大杉豊編 2002 国際手話のハンドブック 三省堂
- ・ 佐々木正人 1995 手話 発達心理学辞典 ミネルヴァ書房 p 315
- ・ リンダ・アクレドロ、スーザン・グッドウィン著 ときざわあき訳 2001 ベビーサイン まだ話せない赤ちゃんと話す方法 径書房
- ・ 吉中みちる・まさくに 2002 赤ちゃんとお手で話そう（書籍）実業之日本社
- ・ 近藤禎子 2004 ベビーサイン——ゲーとパーだけで赤ちゃんと会話 毎日新聞社
- ・ 酒井邦嘉 2002 言語の脳科学—脳はどのようにことばを生みだすか 中央公論新書
- ・ ロジャー・ファウツ他 高崎浩幸他 2000 限りなく人類に近い類人が教えてくれたこと 角川書店
- ・ 志村洋子 1989 赤ちゃん語がわかりますか 丸善メイツ
- ・ キャシイ・ヘイズ 林寿郎訳 1971 密林から来た養女 法政大学出版局
- ・ スー・サベージ・ランボー 加地永都子訳 1993 カンジ 講談社
- ・ アン・J・プレマック 中野尚彦訳 1985 チンパンジー読み書きを習う 思索社
- ・ フランシーヌ・パターソン他 津守淳夫訳 1984 ココ、お話ししよう どうぶつ社
- ・ ハーバード・S・テラス 中野尚彦訳 1986 ニム—手話で語るチンパンジー 思索社 1986
- ・ ユージン・リンデン 岡野恒也他訳 1988 悲劇のチンパンジー どうぶつ社
- ・ 松沢哲郎 2002 アイとアユム—母と子の700日 講談社
- ・ 松沢哲郎 2001 おかあさんになったアイ 講談社
- ・ 松沢哲郎 2000 チンパンジーの心 岩波現代文庫
- ・ 松沢哲郎 1991 チンパンジーから見た世界—認知科学選書23 東京大学出版会

象徴的身振り（ベビーサイン）の保育に与える影響 I

- ・小田亮 1999 サルのことば 京都大学学術出版
会
- ・たきざわあき 2004 ベビーサイン絵本1（ゲー
とパーでなにかができるかな はじめてのベビーサ
イン）
- ・ベビーサイン絵本2（なぞなぞどうぶつえん 動
物をあらわすベビーサイン）
- ・ベビーサイン絵本3（もぐもぐおいしいね 食事
のときにつかうベビーサイン）
- ・ベビーサイン絵本4（でたでたうんち トイレタ
イムのときにつかうベビーサイン） 径書房
- ・吉中みちる・まさくに 2004 ベビーサインで楽
しく遊ぼう 実業之日本社
- ・吉中みちる・まさくに赤ちゃんとお手てで話そう
（DVD版）実業之日本社
- ・ロング朋子 2003 ベビーサインで赤ちゃんと話
そう！ 日本文芸社